

同一化と人格発達

齋藤久美子

Identification and Personality Development

SAITO Kumiko

人格発達を自と他（対象）の力動的関係の展開の中でとらえていくことの必要性は、近年の発達早期に関する種々の心理学的研究の進展ともあいまって一層強調される傾向にある。筆者もこれまで行って来た人格の中核機構としての「自我」, 「自己」の研究を、更にその発達の面により詳細化して行こうとするとき、自他関係とその内在化（internalization）の個人史を理解することの重要性は、殊に臨床実践の中で、自己・自我形成の個別的な具体像にふれていく上でも、極めて大であることを思わせられている。

ここでとりあげる同一化（視）は、そうした自己と対象との間の互いに入り組んだ関係の実像にアプローチしようとするとき、個人によって実際に生きられている経験のレベルからあまり疎隔することのない、現実感をたたえた有効な視点を、提供するものではないかと思われる。われわれにとってこの「同一化」が、たとえあまりに種々雑多な形においてではあれ、すでに日常的に身近な誰しもの体験として遍在していることは、この概念の中に潜んでいる一種のバイタリティや、この概念自身のメタ概念として洗練されにくい生な基質をすでに伝えているであろう。したがってその分、概念的にはどうしてもグローバル、未分化、多相的・多義的なものを扱おうことになってしまうが、筆者はそうした多義性そのものに注目し、必ずしも分節しにくいこの概念の中に含まれるさまざまな位相を吟味してみることでそのことが、通常では見えにくい自他関係の重要な意味を微視的に照らし出すことにつながるのではないかと考える。

同一化に関するこれまでの心理学的研究には、主に社会心理学の領域で、対人知覚や観察学習の実証的研究があり、モデリング理論に基づくモデル模倣行動成立度を結果的に同一化の程度と見做す実験的研究が Bandura (1965) をはじめとして行われたり、Kagan (1958) や Sears (1965) らをはじめとして人格特性レベルの親一子間同一化の研究が行われたりして来たのが主流であった。我国でもこうした流れの研究が柏木 (1966) や萩野 (1969)、春木 (1970) によって展望され、また具体的実証研究が他に松田 (1973, 1977)、森下 (1979) などによっても行われて来ている。しかし、そこでは背景理論や概念のあいまいさ、そしてそれに伴う方法論の問題がすでに種々論じられて来っており、実験状況の中で成立する模倣反応や、自己像または理想自己像と親像との類似性といった指標の中に含まれる同一化的意味も、同一化の生成過程およびその人格の組み込まれ方にまで踏み込んで十分説明されるまでに至っていない。

これらのことは先述したように、この概念の中に、複合した心理的現実が含み込まれていること、また極めて個別的な人間関係史の中に根を下ろした多相性が存在することと関係しており、

顕在的な資料によって明確にアプローチしていくことになじみにくい性質が感じられる。

そこで本稿では、まず同一化の根本的な考え方について理論的・概念的な検討を試みようとするものである。理論的枠組としては、筆者が臨床実践を通して有用性を経験している精神分析的な力動理論における発達の見解と、かなり微視的な対象関係論的自我心理学の立場に今回は比重がかかって行くかと思われる。それはその理論が、筆者のこれまでの自己・自我の研究に、内在化された具体的人物表象、また現実的な対象関係様式を通して、内容面を、具体的に盛り込んでくれる理論であることにもよる。

I. 同一化の定義

1) 同一化と類縁概念

「同一化」は決して聞き馴れない語ではない。それどころか一見身近な日常体験として、われわれはその意味をすでによく知っているようにみえる。それは、この語が、模倣、同調行動（または反応）、社会的促進、^{*}群集心理、(^{*}集団ヒステリー)、情動感染、共鳴、感応、といったいくつもの類縁的内容のものを早速思い出させることともつながっているであろう。

それらはどれも一般的によく生起する、いろいろな程度また質の自他交錯あるいは自他境界後退の現象であり、誰にとっても憶えのあることとして、かなり具体的に、その時の行動像や感情状態が想起されるのではないかと思われる。同一化はそれらとは異なる別個の概念なのか、またはそれらを含み込んだ上位概念的なものであるのか。この問いは簡単に答えられ片づけられてしまうよりも、まず、それら類縁概念をそれぞれ眺め直しながら、実生活の中で生起する人と人との間の距離の変動をもう一度吟味することから始めることも有意義ではないだろうか。

ともあれ、上に挙げた関連概念群は総じて、人格機能が一種他者指向化した状態、主体がその主導性や自律性をいろいろな程度に後退させた状態を指していることにもなる。上記のものに、更に、「憑依」や「(誇大)妄想」をといったものを並べ加えると、一層その印象は極立つであろう。こうした性質は、同一化を考えていく上でも見落せない重要な側面ではないかと思われる。

物理的な現象に、たとえば、二つのコイルが互いに接触していないにも拘らず、一方に電流を流すと他方のコイルにも流れるといったことがあるが、人と人との間でも、ある種自動的とも言えるくらいの相互感応や共振的な伝播現象は否定し難く存在する。近年乳児、それも生後1~2ヶ月程度の乳児が、人の顔面の動き、たとえば舌を出したり口をとがらせたりするのを見て同じ顔面動作をすることを実証するいくつかの実験があるが、そうした早期の反射的な模倣も同様な現象のように見ることができるとも知れない。確かに乳児が相手の動作を丸ごと受胎でもしたかのように、また相手と自分が同じ身体の仕組みを持つことをすでに知ってでもいるかのように、視覚と運動とがそうした見事な共応を示すことは何とも不思議なことさえある。

別々の個体でありながら、人と人との間にはいろいろな形の交叉状態が生まれる。それはまた、相手の方に強度に注意を惹かれている状態、あるいは知らず知らず捲き込まれて「われ」が失われて行っている状態というふうに見えるものであるかも知れない。とは言えその捲き込まれや「われ」が相手に吸収される程度またその質はさまざまである。またそれは一時的である場合もあれば、持続して人格機能全体の他律化が、更には無律化が深刻に問題になっていく場もあるで

あろうし、そうした事態が無意識的あるいは原始的に進行していく場合と、他方意識的な自己モニターがそこで何程か可能である場合とといったものがあるであろう。その他、対象との距離がそのように急激に縮まるとき、それが快的、肯定的な感情質と、不快で否定的な感情質、更には無(失)感情的な性質といったものの中の、どのような感情を伴っているかといった観点、そして更に重要なものとして、そのように対象に引き込まれるという一見受動的、消極的更には退行的に見える心的過程が、人格の主体によってどのような意味を持ち、より大きな流れとして、更に主体的な再統合の過程をたどっていくかといった観点があると思われる。

後者は、より本質的な深い意味での主体の能動性・自発性の問題にかかわるが、対象の中に自分自身を移し入れながら、そこで主体自身の再活性化や自己解放ひいては再創造が、全体的な結果として行われるあり方にそれはつながっていくものである。その場合には、勿論、対象の側にも活性化が相互的に起こる可能性が含まれ、正しい意味での共感の世界や、感情共有体験はその実例であろう。

同一化はこうした拡がりやをすでにはらんでいるいわばグローバルな概念として、むしろそのままにとり挙げられる必要があると思われる。臨床実践にかかわる心理学には、他にも、こうした“nice slang”的な概念が少なくないが、多相的な必然的現実を掬いとらうとしているそうした概念は、逆に、その豊かな内容の吟味を待っているとも言えるし、また、人が特に対人的世界で展開する体験に本来備わっている複合的な性質、両義的であったり多義的であったりする生きた姿そのものへの接近を、促しているようにもみえる。心理療法状況における面接者一被面接者間の関係も、一つの対人的世界として、まさに同じ性質を持ったものに思える。

2) 模倣と同一化

模倣は上記の関連概念の中で包括性の高い概念である。そこには、乳児の反射的な動作模倣に加えて母一子の心理的共生期における交互的な情動模倣といった発達早期の、あるいは自我が能動性を極度に失った病態などに見られる、自動症的な動作模倣といった水準のものなどが含まれる。そしてまた、行動の学習といった能動的意図的な水準のものを模倣が意味することもしばしばであり、無意識的—意識的、受動的—能動的、未分化—分化、一時的—持続的・目的的といったふうに、いろいろなものがみられる。

このようなことから、模倣と同一化は同義的に扱われることもあり、既述の社会学習論的同一化実験においても、模倣行動の成立が実質的に同一化とみなされていたが、精神力動理論においてもこれと似た扱いかいの場合もありながら全体的には、Schafer (1968) が模倣を同一化の単に1つの側面、しかもメタ心理学的用語よりは記述的用語だとするような考えが主流だといえる。また模倣は主として顕在的な行動水準の概念であり、同一化は精神内 (intrapsychic) 過程あるいはメカニズムにかかわる概念であるとも言えるであろう。そして模倣行動は、精神内過程として進行している同一化の産物である場合は多いと思われるが、単に一時的な認知—行動水準のものにとどまる場合も明らかに存在する。

同一化そのものを考察するに先立って、ここでより直接経験的な周辺のものを若干見直しているのは、それらが「同一化」の身近さを思い出させながら、同時に体験に根ざしたその意味内容に触れさせるものであることによるが、そこでもう少し模倣との関係にふれておくと以下の通り

である。

Kernberg (1977) は、子どもが母親の模倣行動をどのようにとるかを同一化マトリックスの指標としてとらえているが、Meissner (1971)も分析関係の中で患者が示す治療者模倣に注目しながら、模倣の意味を重視して考える人の一人である。被分析者には分析者のちょっとした癖や語り口がコピーされることは少なくないが、模倣は純粋な外界知覚と内化 (internalization) との間の中間的な移行域に属するもので、主に無意識過程に属すると Meissner は考える。模倣が背後の同一化を反映している可能性は少なくないが、どのような性質の同一化を反映しているかは吟味に値するというわけである。つまり、分析者との治療的に望ましい関係展開の文脈でとらえられることもあれば、不安や脅威を感じる相手をなだめようとする無意識的な防衛作用に基づいていることもあり、後者はいわゆる「攻撃の対象との同一化」(Frend, A 1936) でもあるが、それはむしろそれ以上の深い同一化を防ぐ意味合いを帯びていたり、また理想化を伴った強力な対象と合一したいというナルシスティックな動機に支配されていたりし、見かけとは裏腹に、本来の意味での治療の進展が妨げられることになる。

しかし、模倣は学習の重要な形態であり、現実に対処する自我機能が、発達の早い時期ほど特に模倣を通して要素的部分的に獲得され、それらの部分機能が練り上げられて自我の有効な執行能力 (executive capacities) が育っていくこともよく知られるところである。Meissner が、Kernberg と共に、模倣をもし同一化として考える場合は、「試行的同一化 (trial identification)」であるとしている点も参考にされる。

また、White (1963) は、発達初期の音声模倣にはじまる言語の生成獲得過程を Piaget (1945) の見解に照しながら、模倣の産物として見ているが、模倣と同一化との区別はある種恣意的になる嫌疑はあれ、“誰かがやっている何らかの行動をなしたい、”というのと、“誰かのようでありたい、”というのとやはり同じでないとの見解をとる。模倣には、物売りの声をとっさにまねるといった単純な即発的遊びレベルのものもあるが、同一化と関連づける場合には、モデルの示す行動がどのような個人的重要性を持つかの観点は確かに抜きにできないであろう。White は、同一化をむしろ特殊な模倣のあり方、つまり、モデルの copying が個々の行動を超えて概括され、モデルのようでありたいという性質、モデルのように有能であろうと試みる性質を持ったものであるとしている。このように積極的な同一化メカニズムに基づく模倣の場合は、たとえば子どもが熱中するごっこ遊びの中にも見られる通り、望ましいと感じるモデルの行動レパートリーをかなりの複雑さで再演しながら獲得し、実際に身につけていくこととなる。

以上のように、模倣の側の多義性と、同一化に内包されるであろう意味の拡がりによって、両者の関係はあまり単純にとらえることができなくなるが、Meissner や White が指摘するような基本的区別を踏まえた上で両者のさまざまな絡み合いを見ていくと、たとえば、模倣が何らかの同一化の結果であるだけではなしに、逆に、具体的な模倣活動が、いくつか行動型を蓄積して行く中で、良きにつけ悪きにつけ同一化を先導して行くといった、両者の関係をめぐるいろいろな実態に触れて行くことができるのではないかと思われる。

3) 同一化の基本的意義

次には同一化の意義そのものに焦点も移すことにして、一般心理学で詳細化されなかったその

意味内容を、発達の精神力動論の文脈の中で、以下見てみたい。

まず、同一化の定義は、通常 Freud の考えにさかのぼられる。そこではまず貪欲な口愛的器官様式との関連が問題にされ (Freud 1915)、そうした身体原型に基づく、同一化の原始的な母型としての体内化 (incorporation) の機制、つまり対象を幻想的に「食人(cannibalism)」、よろしく、体内に取り込み外界から消してしまうという、対象への結びつき欲動と攻撃的な破壊欲動とが入り混った、両価的な心理機制的考察が展開されることになる。

ついで同一化が問題にされたのはメランコリーの分析体験を通してであり (Freud, 1917)、メランコリー患者が、情緒的固着関係にある相手と離別 (対象喪失) したときに健常者が離別体験の中でたどる経過、つまり対象との絆を一つ一つ断念して行きながら、過去の対象にふり向けていたエネルギーを現実に向け変えていくという経過をたどらずに、むしろそれを無意識的に自分に向けるあり方である。つまり自分自身が知らないうちにかつて心的エネルギーを備給していた対象そのものと同一化を起し、かつての対象とのかかわり方を、自分自身を対象に繰り広げる中で、愛情対象への両価的感情が自分に向けられるにいたり、自己非難 (self-reproach) を強く伴った一種のナルシズムへと退行する。この場合の同一化は、自分の内部に対象を取り込むという点で原始的な体内化のレベルであるが、体内化が本来身体作用そのものを指すものであることから、より広く心理的な次元の事象を指すために、「取り入れ」あるいは「摂取 (introjection)」の表現が用いられていく。

そしてこの「取り入れ」の対極に、自分自身の中から取り除き外在化させながら自分以外の対象にそれを帰属させる、「投射 (projection)」のメカニズムを置くことによって、同一化理論を新しく充実させる方向に向っていったとされている。ただ、メランコリーにおける上記のような取り入れは、パラノイアに見られるような、自分の中の不快なものを非現実的に外に追い出そうとする「投射」機制と共に、原始的な防衛のあり方を意味するもので、同一化の病理としてとらえられる。これらは後の研究者達によって「原始的同一化 (primitive identification)」の中に入れて考えられていくわけである。

続いて同一化はそこに含まれる感情面の方に注目して考察が進められることとなるが、「他の人との感情的結びつきの最初のあらわれ」(Freud, 1921. p.105) が同一化であること、これは本当の意味での対象へのエネルギー備給 (object cathexis) に先立つものであることが示された。これは近年の対象関係論の展開の中では、0才段階の中の共生期 (Mahler et al. 1975)、あるいは、自己対象融合の時期 (Kohut, 1971) の母子一体的な相互融即、更には初期の次元での共感的疎通関係にその典型を見ようとするものであるが、Freud においては、このあたりは細分化されないで、前エディプス期全般にわたる特徴としてとらえられている。感情的結びつきの重要なあらわれとして、たとえば、幼い男児が父親の強さや有能さに憧れ、父親のようでありたいといったふうに理想化した感情を持つ例が示される。しかし男児はこの段階では賞讃の対象でもあるが同時に愛情対象でもある父親を所有したい (←「食べてしまいたい」) とも感じているという点で、やはり「体内化」原型の両価性をひきづっているのを、Freud (1921, p.105-106) は見ようとする。

同一化の中で、「感情的結びつき」は重要な要素であり、心理学的実証研究において愛着とか対象への肯定的な感情評価が同一化強度の変数として扱われることもこれと関連する。「結び

つき」における感情内容については、Freud がまず指摘した、いわゆる口愛期リビドーのあり方に特徴的な愛情対象との結合は、相手と合一しながら対象を無化することであるという両価性以外に、更に多様な中味を考える必要があるであろう。たとえば、対象への賞讃的感情のもう一方に、対象が持つ力への恐れや敵意、更には羨望といったものがそれであるが、こうした両価性、あるいはそこに含まれる攻撃質の感情要素は、同一化を妨害するどころかむしろそれを強化させる方向に作用するといった、ある種呪縛的な形の、無意識的で原始的な同一化のあり方は、臨床実践の中でさまざまに観察される場所である。

Freud は同一化における感情的結びつきの作用を、集団心理学的にグループのリーダーと他のメンバー達との関係の中にも認め、メンバーはリーダーを自我理想の代理的体現者としながら、いわば自分が直接追求することの不可能な目標を間接的に追求する中で、メンバー相互間に思いやりある結びつきが生じることを証明している。この場合は指導者という強者との理想像の同一化（ナルシズムの一変容形）と、同じ立場にいる成員間相互の同一化の両方が考えられるのではないかと筆者には思われるが、グループがこの二つの同一化のいろいろな配分によって成り立っているのは事実であろう。

Freud 理論における同一化の考えの中で最も知られるのは、エディプス期葛藤を通しての超自我（自己審級機構）形成であるが、それは上記集団心理学の延長上で考え進められている。White (1963) が鋭く指摘するように、この時期の同一化説明は一般によく受け容れられているかに見えるのとは逆に、Freud の同一化理論全体の難解さを露わにするという側面を確かに持っている。

White の論旨に沿ってこの点を見ると、結局、同一化の本来的に正当な意義がここで再び問われざるを得なくなることも確かである。その要点は、子どもにとっては自分自身の自己愛エネルギーが旺盛に備給された上述の“万能、的理想像（自己との境界が十分定かでない）のようでありたいと、初歩的な同一化をしていた親との間で、“父親が母親と愛し合っている、という面との同一化（自分も母親と未熟なレベルながら異性愛的に愛し合う）を少なくとも絶対に放棄しなければならない。その放棄を迫るのは父親の威嚇であり、審級であるが、そうした攻撃者（制裁者）の規範までも、これまでのように理想像との合体という質の同一化によって内在化すると考えるのは、上述のような同一化放棄の様相が強く含まれることを思うと、矛盾するであろう。したがって、こうした禁止の内面化は単に「取り入れ (introjection)」としておき、その「取り入れ」を通して、母親との間の、（小児異性愛的）目的が禁止された関係を子どもは受け入れていくとした方が混乱が少ないと考えられていくのである。

こうした論究自体が、「同一化」と称される心理的世界の複雑さと、また概念検討の余地を種々我々につきつけてくる。しかしどのような言葉を当てようと、対象関係系の中での心理的現実として上述のような事象が起こっていることは確かであり、心理療法過程の中では、微視的にこうした中味の心理体験が、被面接者の語り出しの中に顔を出して、全体の治療的展開にとっての重要な意味を持っていくことが少なくない。

Freud は上記により主に次の見解を提出したことになる。①同一化の口愛的起源②メランコリーに典型的にみられる、対象喪失に伴う退行、つまり、憎悪をはらんだ対象が内面化されて、自分自身がその対象代理となる同一化。これは Freud が、大まかな発達の視点として、「現実対象の選択」をより前進的 (progressive) なもの、何らかの形で選択されていた対象が同一化的に

内在化 (internalization) される方向を、対象選択の世界からの退行 (regression) とみたことでもある。③子どもが理想像である親のようでありたいという、まだ自-他融合的な要素を残した、原始的で先駆的な対象選択。近年の対象関係的発達論においても、この自-他共生の心理的世界は、以後の自-他関係の発展、また人格形成のための豊穡で不可欠な基盤だとして一般に大へん重視されている。Freud も、同一化を、退行やナルシズムの基盤、あるいは口愛期の両価的破壊性といったものに考え照して、どちらかといえば、あまり発達の前進的ニュアンスではとらえていないようにみえる全体的な印象の中で、次のようなことを述べているのが注目される。「…同一化は、模範とした他の人 (Ich) を型どって、みずからを形成するということである。」(Freud. 1921 p.106) という観点がそれであるが、これは、本稿で後にとり挙げる自我同一化や、選択的同一化そのものではないにしても、人格発達における同一化の積極的・建設的意味につながるものが示唆されているかも知れない。またこれは Ricoeur (1965) も指摘するように、性衝動の対象ではない、人そのものと「共通性」を知覚するたびに生じていく同一化というふうに見ることもできる。また、「否定性」のまだ入って来ない、共生期の自・他融合体験という原型的同一化世界を思い出させるものであるとともに、Fairbairn (1944) が重視する、人の原始的な「対象希求性」を連想させるものでもある。

④. Freud (1923) が、精神装置論を自我、エスなどと合わせて展開する中で、エディプス葛藤解決の過程に含まれる、これまでとは違った、「父親」が母-子-の間に割り込んだ中での三者関係の葛藤収拾の営み。その中でむしろ「取り入れ」といった方が適切なような、価値の内在化があり、その結果精神の構造化が進められる点で意味の大きなもの。

他に、既述の集団成員間ダイナミクスや、またまだ同一化を本格的に論じる以前 (Freud, 1905) に、ヒステリーについての症状模倣という形の同一化が指摘されていた。後者は③のような感情移入の中で生じるのとは違った、身体言語レベルの、意識とは解離したところでの同一化である点が特徴的である。

これら臨床観察を土台にした、主に病理的な同一化の諸見解も④のように次第に一般理論化していき、自我発達論の方向性が開かれていく点は、後の研究者による同一化諸理論に照して興味深い。たとえば②で典型が示されたような、対象選択に同一化がとって代ることは、病理的意味あいだけではなしに、重要な対象との人間関係様式が内在化され、また対象に備給されていたエネルギーも内に溜められていくことであり、そうしたものの蓄積が自我構築にあづかるあり方が更に考察されていくことになるのである。

II. 人格発達における同一化の意義

1) 同一化と取り入れ、投射、内在化

「取り入れ (introjection)」を「体内化 (incorporation)」の心理的一般表現として、すでに Ferenczi の用語でもあったものを Freud が用い、また White がそれを Freud よりも厳密に同一化と区別して用いようとしたことは既述の通りであるが、全体として「取り入れ」は、Kernberg (1966 p.246) が「最も原始的で基本的な水準の内在化過程においてみられるもの」と述べ、またそれは衝動の影響下において感情の色合いを強く帯びているとしたように、より原始的な、ま

た発達史的には初期の“intaking”だとの考え方が一般的である。「投射 (projection)」も同じ水準のものであり、体内化とは逆の「排出 (ejection)」という身体原型が考えられている。両者には“快、対象”と“不快、対象”がそれぞれに対応するが、どちらも自己と対象が分立しない未分化な状態を基盤にしたものである。Knight (1940 p.335) は「同一化は……常に取り入れと投射のメカニズム両方の微妙な絡み合いに依拠している」と述べ、境界例などに見られる「投影同一視 (projective identification)」を「取り入れ」と「投射 (投影)」の合わさったものだとする Meissner (1980) の考えもそれに類するものと見られるかも知れない。いずれにしろ投影同一視は、内的対象 (internal object, また introject の語もあてられる) を分裂させて一部を外の対象に帰属させ、そのように内から外に投射したものと接触し続けるあり方である。自我は自分の内にはなくて外に在るとでもいうべき信じ込みのもとにその接触を続けるという、幻想の対象関係であること、その対象は実は自分自身を外に転じて作り出したものであるため自と他の混同 (confusion) による産物であり、また主として攻撃的な関係が展開される点で、それは共生世界における“快、中心の融合 (fusion)”とは異なっている。また既述のように、Freud が対象へのエネルギー備給か、それともそれが内側に回収された同一化かというふうに、両者を両立しがたいものとしてとらえたにもかかわらず、そこでは、その二者が区別され難いくらい原始水準の、非現実的な心の作用が想定されることも特徴的である。

この投影同一視は境界例水準の病理的同一化として昨今よく知られるものであるが、その幻想性や魔術性は、こうした病理的なものだけに見られるのではない。Jacobson (1964) は、前エディプス期の中のより早い方の時期に幼児が母親と万能的に一体存在であるとの幻想を抱く時期、更に進んで、母親という愛情対象の所持品を持って同じ仕草で腰かけるといった模倣をしながら、そうしているといつのまにか対象のように自分が変身でもするかのような魔術的ファンタジーにひたるという水準の同一化が一般に見られることに触れる。そこでは、“自分=対象そのもの、”と“私=対象のような (like) もの、”とが分化していないわけである。幼児の遊びを見ていると、一人でこうした“変身、”の世界に、一時にしろ、ひたっている光景にはよく出くわすが、これは「原始的前エディプスの同一化」あるいは「原始的感情的 (affective) 同一化」と呼ばれている。

Etchegoyen (1985) によってもこうした水準の同一化について諸家の考えが展望され、全体として「取り入れ」本来の意味に頼った、直接的で、アルカイックな、また未熟で情動的な「一次的 (primary) 同一化」として記述されている。Klein (1955) も「取り入れ」と「投射」が初期発達における中心過程であり、同一化はそれらのメカニズムの自然の結果として生じるとするなど、初期の同一化の中味の説明が諸家によって種々試みられようとする。White (1963) や Kernberg (1977) らのように同一化をもう少し発達の高次のものへの用語として取って置く立場においては、単に「取り入れ」と呼ばれる方がふさわしいものは、結局「一次的あるいは原始的同一化」とされ、他方後述するような「二次的同一化」が狭義の同一化にあたるものとした用い方がより多くなっていく。本稿でも一応この概念分けに従うこととする。

こうした同一化については次項で更に取り上げる前に、「内在化」に触れねばならない。Kernberg (1966) は、「取り入れ」、「同一化」、「同一性形成」を三つのレベルの内在化過程と考えて、それらを包括的に「同一化システム (identification systems)」(p.242) と名づけている。そして内在化は、対象表象、自己表象、そして具体的な感情状態の三つの構成要素から成ると説

明しながら、結局それらの要素を含んだ内在化によって精神構造が発達的に築き進められるとする対象関係論的自我心理学の立場をとっている。また「内在化」の問題を重視する Schafer (1968) も、内的な精神構造は、周囲の環境と個人との間の調節関係 (regulatory interaction) が内的な調節機構に敷移されることつまり「内在化」の結果として築かれ、それがとりもなおさず人格そのものであるといった見方をしている。

その他 Leowald (1979) のように、内在化を、体内化、取り入れ、同一化がさまざまな程度に含まれる広義の機能様式として考え、従って「内在化」ともう一方の「外在化」(externalization) を大きく対置させる形の概念設定がなされる場合もある。

しかしこのような比較的ニュートラルな見方に終始するよりも内在化の積極的な意味を吟味しようとする見解の方が優勢だと言える。そうした中で Kohut (1977) はより微細に内在化を吟味している人の一人で、微細なあるいはマイルドな欲求不満体験がなければ幼児は母親に大きく包まれた万能幻想から出ることができないこと、それがほどよくあることによって“万能、の錯覚をあまり痛手を蒙らずに解くことができることに注目する。そのとき相手の現実対処機能をミクロに少しづつ内在化させて、それが次第に消化吸収されつつ全体的にまとまる方向に変容しながら自己が形成されていくとしながら、彼はこれを「変容性内在化 (transmuting internalization)」と呼んでいる。

内在化の構造生成の意味は重視される傾向を強めているが、それは、Blank (1986) が構造化と分化と内在化とを相互連続過程としながら、内在化を一つの創造と見る (p. 61) 視点にも、よくあらわれている。

2) 同一化の発達的変遷

まずより早期の原始的同一化があるが、この発達の意味は、何よりもそこに原始的な情緒的愛着が想定されるところにあり、それは結局共生期の重要性に集約されていくことになる。Silverman (1986) もこの共生期の意味を再考しているが、相互共感的な感情体験を蓄積しそこで基本的な満足を得ると、それは生涯続くものであり、共感性の発達と愛情のための鑄型であると共に、種々の“喜び、体験における一時的・可逆的退行の“ポイント、にあたるものとなる。そして、この「共生的一体世界」に入れないと、「対象関係の世界」に結局入れないこととなり、不適切な共生体験は、精神病への道を開くものであると結論する。これは将来発達の母体となる、「よい (快的)、内対象 (*good、introjects)」から成る、いわゆる「純粋快 (pure pleasure)、世界」の重視であり、万能的錯覚を保障された自己存在の成立を意味する原始的同一化が、“自我核 (ego-nuclei)、(Kernberg 1980) を生み出すとする考え方である。Freud (1927) は“大洋感情、という共生期の言葉を使いながら自閉や共生のことに言い及ばないまま「一次的ナルシズム」概念を提出したが、やはりこれが変容過程を含みながらも自我発達のための源であると考えていた。既述のように、人格発達上重要な「自我理想」を、一次的ナルシズムの代理的担い手と見ていたことにもそれが現われている。

幼児はやがて対象吟味を進めながら、より広い対象世界に興味を拡げて自己・対象一体を解いていこうとし、また外界探索という目標追求のためにも、攻撃的エネルギーが用いられていく。母一子間に愛着行動と分離行動の往復をめぐって二人の折れ合いに難しさが生じてくる 2～3才

頃になると、先述の原始的同一化の質がその事態を左右する。つまり満足のいく快的な introjects が中心的に定着している度合に応じて、このときの母子関係の危機は子どもにとり大きな脅威にならず、対象像も「快」と「不快」の間の動揺に耐えて、次第に全体としての恒常性を獲得する方向に向かう。他方一次的同一化が「不快な (bad) introjects」を伴っている度合に応じて、ここでの欲求不満や苦痛の体験は子どもにとって過剰なものとなり過ぎ、対象イメージが否定的な方向に不安定に変動する中で、いわゆる見捨てられ不安や分離不安に圧倒されてしまうわけである。そのため「対象恒常性」やそれに伴う「自己恒常性」も形成されにくくなり、また脅威から身を守る原始的防衛が敷かれる中で発達的前進が疎まれ、境界例などの重篤な人格障害が結果されていく。先述の Kohut による「変容性内在化」はこの場合の欲求不満の建設的なはたらき方を意味しており、不満を通して幻想的二者一体の世界から離脱しながら、現実的な対象像と自己像が生成する中で、いわゆる「現実自我」が形成されていくあり方である。

二次的同一化 (secondary identification) の観点は、このあたり以降における現実的な自我機能・構造の形成にかかわるものだと言えよう。これは自己と非自己 (not-self) が未分化な状態から抜け出て、次第に対象が分立してくる経過の中で、対象について、認知能力の発達も加わった現実検討が種々試られた上で起る同一化である。従ってこれは、一次的同一化の場合のように一体感的感情体験を生み出したり、全能感幻想を生み出したりするものではなく、その意味ではそうした心地よい幻想世界の解体を意味するものである。しかし現実的限界がありながらも、自分自身の行為によって具体的な効果を生み出して行ける有効な機能的レパートリーを獲得し、それを内的に構造化して行くこととかわる同一化である。従って結果的に生成する自己表象も対象から一層分化したものであり、そこには「対象とかわり合っている」という観察を含んだ自己表象も含まれる。また感情的色合いも、Kernberg (1966) が指摘するように、先の同一化の場合のように強烈ではなく、またあまり漠と拡散しているのでもない質のものである。

こうした同一化は、従って、もし同一化対象との関係が強い情動に支配されすぎていけば、それは、たとえば興奮させられたり拒絶されたりする形で相手に捲き込まれることでもあるために、二者が未分化になってしまい、本来の意味で、起こりにくくなるであろうと思われる。もっとおだやかで安定した、確実感のある感情状態が基盤になっている場合にこそ、そこでの対象は明らかに距離を失わないで分化してとらえ易くなり、Jacobson (1964) が「選択的同一化」と呼んだような、子どもが自分自身の自我形成状況に見合う対象の属性に、みずから選択的に注目する中での同一化が、主体的に生じていくと思われる。この同一化の過程は必ずしも意識的意図的なものではないが、自我が自律機構を修正的に発達させていく営みとして、常に自我の資源になるものを探索し続けるという一種の前進的な能動性の中から、生み出されてくるものと考えてよいであろう。

Rank (1949) は、こうした二次的同一化を促進したり妨害したりする母親のあり方を考察している。自他の区別をはっきりつける方向に発達を促すような環境を提供しない母親は、母親と同一化する子どもの能力そのものをもいびつにしてしまい、統一的な人格と現実原則の発達を共に妨げてしまう点の考察である。また同じく Rank (1950) が、単一の機能を自我が断片的に同一化によって発達させて行く以上に、衝動をコントロールしたり、総合的に自己調整したりする機能、また現実を全体的に吟味する機能の発達は、母親の安定した全体像の内在化を中核として

こそ進められうるとするのも興味深い。

適度な欲求不満は、共生的世界における一次同一化的な良き対象の内在化によって支えられながら、自我機構構築にあづかっていくが、更にエディプス期といわれる幼児期後半にいたると、既述のような複雑なダイナミックスの中で、葛藤を介した重要な同一化、内在化を生起させていく。それによって自己観察やより大きな原則による自己コントロール機能、性同一化を含めた自己像と、対象像の分化・拡充が果たされていく。エティプス葛藤は、一般に言われる通り、愛情関係を失うおそれや報復の攻撃を受けるおそれと言ったものを含む脅威の体験でもあることから、この期の同一化は、攻撃者への服従の同一化といった防衛的な性質を帯びていることも否めない。White が「同一化」と言わずに、「原始的同一化」と同義的な「取り入れ」概念をあてた意味もそこにあるが、実際に、そこまで至ることができずに、再び母親との“合一錯覚”を何とか作り出そうとする自・他未分方向への退行も種々見られるのである。

病理水準の診断に、前エディプス期にとどまっている水準かどうかの基準設定が多用されるのも、もしこの期の重い負荷を通過できれば、より堅固な自他分立と能動的でより全体的な形の自己構築に向けての強力な推進力が得られるという重大な発達の岐路がそこに意味されているからである。最近注目されるいくつかの人格障害は、そうした推進力を獲得するのとは逆に、自己破壊的な万能性のために、対象と感情的つながりが持てなかったり（一次的同一化による“悪しき（不快な）、introjects が自己一対象破壊の方向に万能性を発揮するために）、すぐに原始的对象関係が内的に活性化されて、二次的同一化を特殊なファンタジーによって歪めたり困難なものにしたりするといった、エディプス葛藤対処以前のレベルにとどまる発達障害を示している。

一次的から二次的レベルに向けての同一化の発達の変遷が望ましい形で進んで行った場合には、同一化の人格形成的意義はより大となっていく。つまり同一化は、自と他を心理的に、感情を伴って結び合わせるという側面と、一方、対象吟味によって、「他」の中の「自」と違う部分、また別の「他」とは一層違う存在である「自」といった、“違い”の同定、あるいは差異化を含んでもいる点で、前進的に自・他を再創造する性質を担っていると言えるのである。

同一化を総合的に見るとそこにはいろいろな様相が含まれることに気づかされる。建設一破壊、対象の質の“快、一“不快”、退行性一前進性、防衛性一発達性、更には、一時性一永続性（表面的）浅さ一深さといった特徴をさまざまに含むのが改めて思い浮かべられる。そして同一化によって内在化されるものは、人格特性や態度、行動型、いわゆる“自我興味”といわれる動機や価値にかかわるもの、思考、感情、など広くにわたっている。

臨床的にはいくつかの同一化の病理が観察されるが、筆者が最近特に注目しているものに境界例レベルの症候群の同一化の問題がある。境界例と一口に言ってもさまざまなものが含まれるが、その中には、自己自身の存在同一性を築いていくことに着実に資する形の同一化とは異質の同一化が少なからず筆者には経験されている。見かけの上では容易にいくつかの対象像のコピーになり、その時々々に仮りその自己高揚や、自己肥大的充実のようなものは実現されているようでありながら、やはりそれは一時的で完成することのない、長い目で見ると次々と使い捨てられ、着替えられていく同一化であって、逆に、自己の側の空虚性がそれらを通して再確認されていく。

Meltzer (1975) の「貼りつけの同一化 (adhesive identification)」に示される、表面的で単純な、ことばばかりで空虚な、一貫性や深みのない、皮膚レベルの、単なる模倣に過ぎないので

はないかと思わせる同一化のあり方の見解も参考にされるところである。他にも個人単位ではなく家族の中で成員間に無意識的に生起する、さまざまな形の、“folie-a-deux” 的基質の原始的相互同一化など、同一化の面から問題が照らし出される場合が少なくない。

また治療場面における面接者と被面接者の間の「同一化」関係は、転移の問題とも絡んで、たとえば Meissner (1981) が患者の“悪しき、introjects の力を“分析者、introjects によって減弱させていく例を報告しているように、具体的に吟味されるべきものを多く含んでいる。

以上、本稿では、同一化をまず概念とその背景理論について吟味し直してみた。人間が起こしてしまう、あるいは能動的に生起させていく同一化を、自己と他者の「存在」の発見、拡充、改変の過程として、また内在化による自己表象と他者表象の発達の形成過程としてとらえながら、人格の中核機構構築にかかわる全体的な道筋を考察した。同一化の健常なあり方と病理についての種々の具体像に関する検討や、発達のより細かい段階の吟味は後の稿に譲ることとする。

文 献

1. Bandura; A.(1965) Influences of model's reinforcement contingencies on the acquisition of imitative responses. J.Pers. Soc. Psychol.,I, : 589-595
2. Blank, R & Blank, G.(1980) Beyond Ego Psychology —Developmental Object Relations theory— N.Y. Columbia Univ. Press
3. Etchehoyen, R.H (1985) Identificaton and its vicissitudes. Intern. J.Psychoanal. 66 : 3-18
4. Fairbern, W.R.D.(1944) Endopsychic structure considered in terms of object relationship. Int. J.Psychoanal., 25 : 70-93
5. Freud, A.(1936) The Ego and the Mechanismus of Defence. N.Y.Intern. Univ. Press, 1946
6. Freud, S.(1905) Fragment of an analysis of hysteria. S.E.7.
7. ——— (1915) Instincts and their vicissitudes. S.E.14
8. ——— (1917) Mourning and melancholia. S.E.14
9. ——— (1921) Group psychology and the analysis of the ego. S.E.18
10. ——— (1923) The ego and the id. S.E.19
11. ——— (1927) The fufure of an illusion. S.E.20
12. 春木豊, 都築忠義 (1970) 模倣学習に関する研究. 必研. 41 : 90-106
13. Jacobson, E.(1964) The Self and the Object World. N.Y. Intern. Univ. Press
14. Kagan, J.(1958) The concept of identification. Psychol. Rev., 65 : 296-305
15. 柏木恵子 (1966) 同一視に関する最近の研究. 教心研. 14 : 230-245.
16. Kernberg, O.(1966) Structural derivatives of object relationship. Intern. J.Psychoanal. 47 : 230-253
17. ——— (1977) Object Relations Theory and Clinical Psychoanalysis. N.Y.Aronson
18. ——— (1980) Internal World and Fxternal Reality. N.Y.Aronson.
19. Knight, R.D.(1940) Introjection, projection, and identification. Psychoanal. Quart. 9 : 334-341
20. Kohut, H.(1971) The Analysis of Self. N.Y. Intern. Univ. Press
21. Leowald, H.(1979) Reflections on psychoanalytic process and its therapeutic potential The Psychoanalytic, Study of the Child., 34 : 155-167
22. Mahler, M.S et al. (1975) The Psychological Birth of the Human Infant : Symbiosis and Individuation. N.Y. Basic Books
23. 松田醒 (1973) 幼児の母親模倣行動における母—子関係の影響. 心研. 44 : 79-84
24. ——— (1977) 母親言語行動の模倣における母親同一視要因の影響. 心研. 48.208-215

京都大学教育学部紀要 XXXIV

25. Meissner, W.W.(1971) Notes on identification II, Clarification on related concepts. *Psychoanal. Quart.*, 40 : 277-302
26. ——— (1980) A note on projective identification. *J.Amer. Psychoanal. Assoc.*, 28 : 43-67
27. ——— (1981) *Internalization in Psychoanalysis*. N.Y.Intern. Univ. Press
28. Meltzer, D.(1975) Adhesive identification *Contemp. Psychoanal.*, 2 : 289-310
29. 森下正康 (1979) 親和性と親子間の価値感・性格の類似性 *心研*. 50. 145-151
30. 荻野醒 (1969) 同一視に関する心理学的研究——方法論的一考察—— *名城大学教養課程部紀要* 2 : 59-78
31. Piaget, J.(1945) *Play, Dreams and Imitation in Childhood*. N.Y.Norton, 1951
32. Rank, B.(1949) Adaptation of the psychoanalytic technique for the treatment of young children with atypical development. *Amer. J.Orthopsychiat.* 19 : 130-139.
33. Rank, B.&Mac. Naughton, D.(1950) A.Clinical contribution to early ego development. *The Psychoanalytic Study of the Child.*, 5 : 53-65.
34. Ricoeur, P.(1972) *De l'interprétation, essai sur Freud*, Edition du Seuil. (久米博訳 フロイトを読む. 新曜社. 1982)
35. Schafer, R.(1968) *Aspects of Internalization*. N.Y.Intern. Univ. Press
36. Sears, R.R.et al. (1965) *Identification and child rearing.*, Stanford. Univ. Press.
37. Silverman, M.A.(1986) Identification in healthy and pathological character formation. *Intern. J.Psychoanal.* 67 : 181-192
38. White, R.W.(1963) *Ego and Reality in Psychoanalytic theory*. *Psychological Issues.*, Monograph 11. Intern. Univ. Press